

野鳥たより

—北海道—

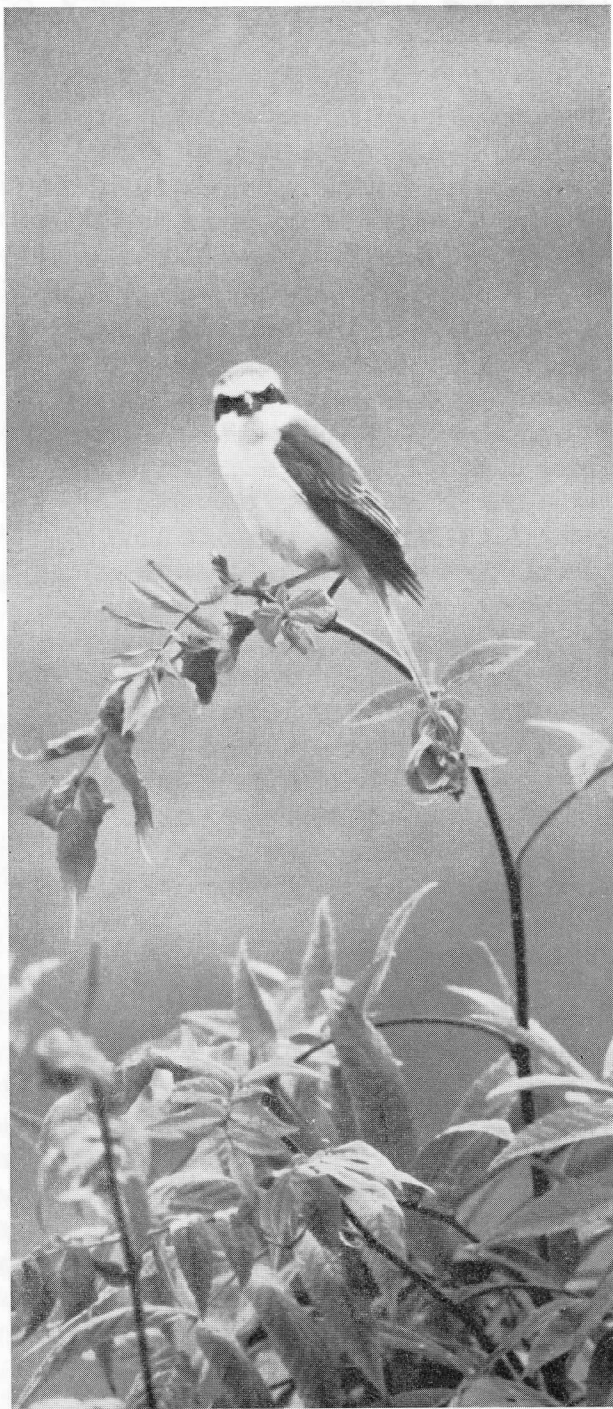
第 10 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和47年5月
5月・8月・11月・2月 年4回発行

初夏の原野には、原野だけがもつ独特の空気がある。野をわたる風に乗って、シマアオジの吹くフルートが細くひょうひょうと聞えてきたり、アシの陰からクイナがふと内気そうな顔をのぞかせてすぐ消えてしまうのが見えたりすると、原野は、もはやただの荒地ではなく、かけがえのない宝物を秘めた土地と思えてくるものだ。

アカモズは、原野の鳥としてはあまりめだつほうではないが、なかなか美しい色彩をしている。背の褐色も、腹の白もすっきりと冴えていて、目とおる黒い線と眉の白の対照も鮮かである。大きさはモズとほとんど同じだが、長い渡りをするこへの適応として、モズよりも長い翼をもっている。

アカモズとモズは習性がよく似ている。そのため、同じ場所に両



—アカモズ—

者が共存することはむずかしいのかもしれない。おそく渡ってくるアカモズが、早くからなわばりを確立しているモズに追い立てられることがある。ふつう同種内の関係であるなわばりが、異なる種に向けられる例として、めずらしいことといえよう。それでもアカモズはなんとか灌木のしげみに居を定め、つれあいを迎えて育児にはげむ。ヒナが巣立すると両親は子供たちを二群に分け、それぞれ一群ずつ受けもって世話をするという。

夏のおわりのおだやかな日、アカモズは次第にたかまる内からの衝動に駆りたてられるように、梢から舞い上っては滑空することをくりかえしている。彼が原野を去って南に旅立つのは、それから間もなくである。(写真は濤沸湖畔で 撮影柳沢紀夫)



日米間で

鳥類保護条約

◇ 日本とアメリカで渡り鳥を保護

野鳥保護団体等の強い要請で、10年来の懸案となっていた日米渡り鳥保護条約（正式な名称は、渡り鳥及び絶滅のおそれある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府とアメリカ合衆国政府との間の条約）が、3月4日外務省において、福田外務大臣と、マイヤー駐日米大使との間で署名された。

この内容を要約すれば、①両国間を往復するシギ、ハクチョウ、ガン類など渡り鳥 189種の捕獲、その卵の採取を規制する。②それぞれの国で絶滅のおそれある鳥とその加工品の輸入を規制する。③両国は保護の対象となった鳥の生息地の環境保全と改善に努める。④これらの鳥の実態と保護について共同研究資料の交換をする、などであるが、この国際条約は日本では始めてのもので、今後は日中、日ソ、東南アジアとの条約締結へも進むことが予想される。

この条約の調印にともない、環境庁では「特殊鳥類の譲渡等の規制に関する法案」を今国会に提出したが、この中には絶滅の危機にある鳥類として、日本28種、米国46種の鳥が指定され、この鳥は譲り受けや譲り渡した輸出入などの一切の行為が禁止され、特別に保護されることになっているが、本道に関係するものとしては、

タンチョウ、カラフトアオアシシギ、アホウドリ、シジュウカラガン、ニホンイヌワシ、エゾシマフクロウ、エゾミュビゲラ

等が指定されている。

◇ 鳥類観測ステーションの設置

こうした渡り鳥と、特殊鳥類の保護対策を進めるため国の予算も大巾に増額されている。増額されたといっても、アメリカの約200億円を越える行政費に対し、僅か1億数千万円であるが、この予算の中から、本年は野鳥の標識調査を実施するため「鳥類観測ステーション」が全国に18カ所設置される。

この観測ステーションは、1級と2級があり、全国で1級が3カ所、2級が15カ所であるが、本道には1級1カ所、2級3カ所が設置される予定で、1級が道北地方のサロベツカクチャロ湖畔に、また2級は天売島、大黒島、風蓮湖畔が候補地となっている。

さらに、渡り鳥の渡来、繁殖地として重要な干潟の調査が進められることになっており、ノトロ湖、サロマ湖サロベツなどがあげられているほか、タンチョウの生息地の調査が実施される。

また、野鳥の森の設置は、全国4カ所のうち本道に1カ所の建設が内定しており、美瑛町の白金国設鳥獣保護区の中に設置される。この野鳥の森は、野鳥保護思想を普及するため、野鳥誘致のための保護施設と、探鳥路を設置するもので、全額国庫によって建設される。

国の事業の方向が、本道を対象として大巾に拡大しているのは、鳥獣における本道の地位を示すものであり、これに呼応した住民運動の併行が必要であろう。とくに生態の明らかでない野生生物の研究調査の分野が、やっと一歩ずつ進みだしたことを心から歓迎したい。

◇ 鳥獣審議会が第3次計画を答申

3月22日 札幌市富士屋ホテルで開催の北海道鳥獣審議会（会長犬飼哲夫）は、昭和47年度から5カ年計画で実施する第3次鳥獣保護事業計画を知事に答申した。

鳥獣審議会は、鳥獣保護や狩猟に関して、知事の諮問に応ずるため設置されており、委員15人は動物学者や、鳥獣保護団体、狩猟者団体の代表、農業団体、行政機関の職員などによって構成されている。

鳥獣保護事業計画は、鳥獣保護と狩猟に関する法律によって策定されるもので、その基準は環境庁長官が定めることになっており、今回計画されたあらまは次のとおりである。

- 1 鳥獣保護区は、既設の238箇所さらに新設94箇所を加えて面積約28万ヘクタールに拡大する。
- 2 休猟区は、市町村数の約3分の1を休猟させるための措置をとる。
- 3 鳥獣保護区内の施設の整備を強化し、とくに誘餌木等の植栽を進める。
- 4 鳥獣保護員を現在の140名から213名に増員し、鳥獣保護区の管理や狩猟取締りを強化する。
- 5 鳥獣の生息現況等により、鳥類分布図や、鳥類目録を作成する。
- 6 道内4カ所に野鳥公園を設置し、人間と自然との対話を深める。

増毛の樹園地にみる冬の鳥

高橋 明 雄

例年になく積雪の少ない冬であった。季節の進行もめっぽう早いような気がする。

1972年3月1日、増毛町市街地（西曉寺の庭）でムクドリを1羽見たが、19日には5～6羽づつの小群が、中歌鉄道防雪林と民家の間を往来して賑やかであった。以前からそう思っているのだが、増毛地方でもムクドリは越冬しているのではあるまいか。そういうグループがいるような気がしてならない。

ハクセキレイについては3月8日初認されたが、私が最後に確認したのは昨年10月15日に、暑寒別川畔黒岩尻でハクセキレイとセグロセキレイとが混ってさざめく姿であった。ハクセキレイが雪の消え去った農家のトタン屋根にとまり、春がきたことを告げるので、この頃から園芸農家は外廻りの仕事の手筈を整えるのに余念がない。

そういえば、毎年のように群をなして果樹園を襲う、ウソの姿はほとんど見られなかった。主としてウメの芽を食害し、これがなくなるとスイミツ、サクランボの順に食べ、リンゴは余り実害がない。

大群がみられるのは短い期間だが、食欲は旺盛なので全滅に近い被害となる。ウメやスイミツは果樹園経営上補助収入源として欠くことのできぬ存在なので、農家が敏感になるのは当然のことだ。

ウソが姿を見せないのは、むしろ心配の種である。どこかで大量に捕獲されているのではあるまいか、などと気になってしかたがない。それほど、この大食漢は評判が悪いのだ。鼻をつきあわせていれば腹もたつが、姿をみせないで寂しい思いをするのが、常連の顔である。

樹園地の収穫せずに終わった果実は、腐ってあちこちに落ち、ヒヨドリの餌として貴重である。かなり倉庫の近くまで寄ってきて、大胆に索餌する。

エゾアカゲラは古くなったリンゴの幹に穴をあけるので、これも嫌われている鳥のひとつだ。もっとも考えようによっては、更新すべき木を教えてもらっているようなものだ。

キレンジャクとヒレンジャクは混っていることもありポプラなどの高木にとまって、やはり腐果（リンゴ）を食べている。

暑寒別川流域にはヤドリギも多く、時にはサクラの木に寄生していることもあるが、これもキレンジャクの餌になっているらしい。そういえば、この地域にはネナシカズラも多いので、野鳥の餌としてはなかなか有効である。

カケスは好奇心の強い鳥で、冬枯れの樹園地に出没して、なかなか逃げ去らない。

いつもならば三月に入ると、鉄道保安林の残雪の中に点々とハシブトガラスの死骸を見るのだが、今春はほとんど目につかない。予想外の暖冬だったことも原因のひとつではあろうがむしろ食物が潤沢に得られたことの方が、彼等にとっては幸運だったであろう。

増毛港で水揚げされるスケトウダラの漁は比較的良好だったので、水産加工場から吐き出される廃棄物は豊富に彼等の食卓を潤した。内臓は大好物、時にはカスベやタコの臓物をみつけて、メニューを工夫することもできる。川口へする習慣があるので、これへ蟬集するのである。幸福な黒坊たち。

最近、漁協で力を入れているサケ・マスふ化事業所の付近で、カワガラスを2羽目撃した。すでにふ化した稚魚は戸外の水槽に入っているが、日光浴のためには蓋をとり除く。

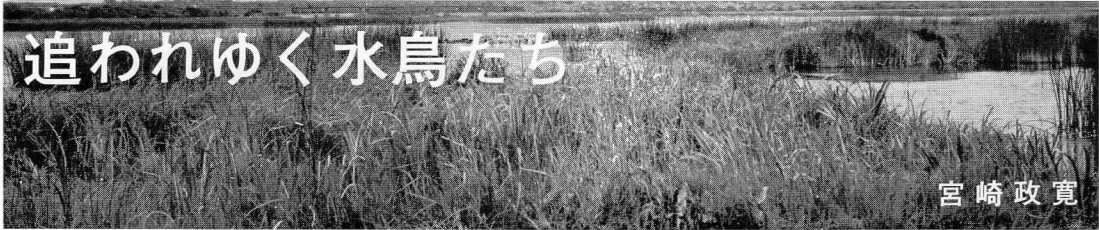
ほんの出来心で、彼等が稚魚を食べたりしなければよいが……

管理人と番犬とが、よってたかって仲のよい田舎者の夫婦を、総括したりしなければよいがと気にかかる。

3月12日の増毛町暑寒沢の探鳥では、下記の鳥をみたので次にメモする。

キレンジャク、エゾアカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、カケス、シジュウカラ、カワガラス、コガラ、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ 以上13種。 (増毛高等学校)





追われゆく水鳥たち

宮崎政寛

神奈川県一県に匹敵するといわれるほど広い勇払原野にも、工業港の開発、東部工業港の着工が間近に迫っており、野鳥の宝庫も年ごとに埋立てられ、渡り鳥の数も年々減少の一步をたどりつつある。白鳥、マガン、ヒシクイ、カモ類の中継地ウトナイ湖、弁天沼も、やがては鳥の姿も見られなくなることと思われる。雄大なオオハクチョウも、勇払川の改修によって、水は深く、また流れも早くなり、遮蔽物も全くなり、一昨年までは大空を我物顔に飛んでいた姿も見られなくなった。

本道には数少ないアオサギのコロニーにも、今年は何羽のアオサギが来てくれることだろう。好物のドジョウやカラス貝、タニシなども附近の川沼から追放されてしまった。昨年ドジョウを取寄せてコロニーの近くに置き餌付けを試みたが、用心深いアオサギには成功しなかった。毎年暖かい地方へ渡って行き、春先に帰って来るアオサギが、昨年12月末と今年1月17日と、1羽ずつウトナイ湖で確認された。越冬していたのではないかと思われる。

優美な姿で楽しませてくれたキレンジャクも今年は見ることができなかった。

水禽類もどんどん北上しており、3月25日現在、ウトナイ湖、弁天沼を中心に、マガン、ヒシクイ 約200羽、白鳥も 約200羽、マガモ・オナガガモ・ヨシガモ・コガモ・オシドリ等は今が一番羽色がよく、フアッションションを見るようで、最も多い時期は4月初旬、マガン・ヒシクイは 約2,000羽、カモ類は何万羽と翼を休め、これらの湖沼では、あたかも水鳥のオーケストラを聞くような感がある。彼等は天候の回復を待ち、朝早く海外旅行に旅立って行く。

このように何千年来続いてきた渡り鳥のコースも、産業開発に追われ、だんだん狭まり、あちこちに工場が進出して色とりどりの煙を吐出している。野鳥を追出し、やがて人間も逃さなければならぬような国土にはしたくない。野鳥の姿も昔話にならぬよう、自然を大切に残しておきたいものである。

(苫小牧市在住)

：：：

鳥の旅 — 冬の道東 —

藤巻裕蔵

北海道では冬になると野鳥がぐんと少なくなってしまふ。探鳥会にいても、夏ほどたくさんの鳥に出会うことはない。しかし、冬になると夏にはめったに見られないめづらしい鳥を見ることができる。タンチョウやオジロワシなどがそうである。それに冬だけ日本にやってくるオオハクチョウなどがある。こういった鳥を見に2月下旬に道東をまわった。

タンチョウ

釧路駅でおり阿寒湖畔行のバスにのると、リックをもち同じようなかっこうをした人が何人もいる。みなタンチョウを見に行く人なのだろう。ツル公園でおりる人はなく、みな23線で下車すると山崎さんの畑へと向う。ここはだいぶ前から餌づけをしていて、毎年冬の間野生のタンチョウが食事にやってくる場所である。観光客の間ではツル公園より有名になっているようだ。

着いたときには、まだタンチョウは来ていなかった。目につくのは望遠レンズの列だけ。やがて、3羽のグループがとんできたのにつづいて、2~4羽づつがとんでくる。たいていは成鳥とまだ褐色の首をした若鳥である一つのグループが家族なのだろう。餌をたべるもの、つ



つきあうもの、首を高くあげて鳴きかわすもの、さすが動きは優雅である。大きなタンチョウにくらべると、一緒に餌をあさっているハシボソガラスが小さくみえる。スズメにいたってはゴマのようである。

タンチョウの数は、帰るまでには25羽になっていた。

オジロワシ

野付湾にはりつめた氷が朝日で赤くかがやき、それがやがて白くなりはじめると、コマイ漁がはじまる。氷の下にはあってあった網をひきあげると、コマイやカジカなどがとびだしてくる。はじめのうち元気だった魚も、寒さですぐに凍ってしまふ。雑魚はその場にすてられるので、これをねらってカモメ、カラス、ワシが集ってくるわけである。

20倍の望遠鏡でみまわすと、広々とした氷のあちこちにオジロワシがおりている。全部で8羽。中には尾のまっ白な成鳥もみられ、ときどきとびたっては、ゆったりと滑空する。まわりにいるハシボソガラスとくらべても相当の大きさのはずであるが、それほど感じないのは広々とした氷上のためであろうか。

オオハクチョウ

尾岱沼の少し南にある白鳥台。ここは春別川の河口で冬でも氷がはらないため、オオハクチョウが集まってくる。青い海の上はみわたすかぎりオオハクチョウといっても、いいすぎではないほどである。遠くで休んでいる大きな群は白い帯となって、まるで流水のようである。全部で1万羽くらいはいるであろうか。



近くにいるものは、首を水中につこんで餌をあさっているが、エンバクをまくとすぐ目の前まで近よってくる。餌をたべるのにおしあいへしあいの混雑で、まるで飼育されているアヒルのようである。これとまったく対照的なのがオジロワシで、ぜんぜん人間をよせつけようとしなない。望遠鏡を使わないと、その姿をはっきりと見ることはできない。しかし、そのほうが、野生の鳥を見るたのしみとしてはよいような気がする。

コオリガモ



道東の鳥の旅の最後は花咲港である。冬の港は、海がシケて船がはいってこないかぎりひっそりとしている。

氷の上でオオセグロカモメやセグロカモメが休み、氷のない海面ではコオリガモが「アオナ、アオナ」となっている。近よると遠くへ泳いでいってしまうが、餌をさがしにもぐり、海面にとびだすたびに少しづつ近よってくる。こちらが動かないでじっとしていると、すぐそばまで来て「アオナ」を唄う。

コオリガモはタンチョウやオオハクチョウと比べるとあまり見ばえのしない鳥であるが、人間をそれほどおそれるもせず、かといってなれなれしくもない。今回の鳥の旅では、この鳥が見ていて一番たのしかった。

鳥と観光

阿寒のタンチョウも尾岱沼のオオハクチョウも、すっかり観光名物になった。5年前に尾岱沼に行ったときは見物する人も数人であったが、今度はウィークディであるにもかかわらず、いれかわりたちかわり人が訪れ、常時30~40人もがオオハクチョウを見ていた。人が増えてくれば、中には鳥に「人害」をもたらすような人もでてくるのではないだろうか。また阿寒で聞いた話であるがカメラマンの中には、タンチョウの飛びたちをうつそうとして、ものをなげ、おどす人がいるという。写真の場合、見るだけでは満足できずカッコよい写真をうつそうとするから、問題となることも多くなるだろう。抱卵中やひなを育てるときには、とくにそうである。現にオジロワシやアオサギではいろいろと問題がおきており、新聞でも報道されている。

「現在SLブームで、マニアはカメラをかついで機関車を追いまわしている。しかしSLの寿命もあと数年。そのとき行先のなくなったマニヤは鳥に向うのではないか」。これは小川巖さんが「私たちの自然」に書いていることである。もし、こういうことになれば、鳥に対する「人害」も増えてくるであろう。私たちは鳥を見て楽しむだけでなく、このような問題にも関心をもたなければいけないと思う。



鳥 語 (2)

三 浦 五 郎

前号で、キクイタダキの属する科に触れた処、百武氏から、昭和38年に鳥学会の発表で、シジュウカラ科からウグイス科に移籍されている旨の知らせを頂いた。したがって、私が挙げた図鑑では、図版の都合で、元のシジュウカラ科の位置のまま、脚に付けた名札の科名を変えるに止めたのであろう。キクイタダキにとって、ラグビーでいうと、いわばアンウィルオフサイドであった。

中学に進んだ春、キクイタダキ出合の所から測量山の麓に移った。この三年間、私は野鳥にとり憑かれたといっても過言でなかった。山あいの一部を削った所に建てた家で、二階の私の部屋の窓辺には、かなりの大木が生えている雑木林の山が迫っていた。いろいろな鳥がやって来たから、居乍らにして野鳥の観察がよくできた。

^{オトリ} 囀籠にとりもちを塗った枝を差して、それに止った小鳥を捕える方法を教えてくれたのは、近くに居た同級生の長谷川四郎であった。彼の長兄の正治氏は、当時小樽高商の学生で、帰省した時に、「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」などとよく言っていたが、昨年の選挙で、鴻鵠の志を遂げて室蘭市長になられた。彼の家の玄関先には手製のケージがしつらえてあって、その中に、鴻鵠ならぬ、マヒワやベニヒワの類の燕雀共が飼われていた。遊ぶときも悪いことをするときも、行動は大概一緒であった。学校の帰りK邸の葎園に案内してくれたのも彼で適々、庭に園丁が居ると、訝る目を通り過ぎて、先代の胸像に恭しく最敬礼をし、デザート卓につかず退散したものだ。

夏の海の季節以外は、大半裏山に出かけたから、四季に応じて、どこに行けばカタクリが採れ、福寿草があるか、桑の実を喰べたい時はあそこ、クルミはあの沢という調子であった。仲間同志で周知の場所もあったが、それぞれ秘密の場所を持って楽んでいた。

野鳥についても同様であった。手元のヒガラが、仲間の声を聞いて、急に勢づいて鳴出すと、われわれは、籠を急いで枝にかけ、身を翻して藪に隠れた。シジュウカラ科の鳥は、梢から一気に飛んで来て、もちのついた枝に止る。

私は、野鳥を記念すべき場所に、勝手にその鳥の名前をつけて意味付けた。例えば、よくエナガが来ていたワタボウシ林。晩秋に、ヤマガラを2羽捕えたヤマガラ沢。フイ、フイの聞えるウソ林という風に。マスイチに近く潮風に苛めつけられたウソ林に、数学の滝沢先生の姿を

よく見かけた。自分のウソが鳴かなくなると、口笛で呼んでいるように見えた。そんな時、何故か私は、山の小径で若し先生と出会うことがあれば、互にどんなにか気遣いしい思をするに違いないと、そくさと落葉を踏んで先に山を下った。ウソの雄は、喉から胸にかけバラ色で、玄人のおとな達は、これを照りと言っていたように覚えている。冬から早春にかけて、桜や梅の木の芽を啄みにやって来る。口を開かず、喉の奥で含みのあるフィーヒョーの鳴声が、やがて暖くなるにつれ、甘えるような口舌に変わって来る。ウソ林には、ヤマザクラでもあったのであろうか。去年のゴールデンウィークに、37年ぶりに、こゝを訪ねて見た。ヤマガラ沢には、巣箱がかけてあったが、みぞれのため、ウソ林の桜は確められなかった。学問の神として菅原道真を祀る天満宮には、「東風吹かば」に因んで、梅林がある。だから、天満宮には、ウソの玩具が売られている。太宰府のは持っていたが、亀戸天神のを欲しくて、1月25日の祭りに買求めてくれるよう、人に頼んだが手に入らなかった。朝のうちに受験生に買いつくされてしまったとのことであった。ウソはいつの間にか、ソフィストの魔力を持つようになってしまった。

大根を干す頃の小春日和に、ジクジク、チューンチューンとマヒワが群れてやって来て、タラノキの実を喰べていた。雄は、体全体の黄色が濃く、頭の黒の斑点が判然としている。晩秋には、ミソ沢と名付けた所で、ミソザイが尾を立て、小さな体を上下左右に振っては、地面すれすれに飛び交っていた。大雪山探鳥会での見事な囀りを聞くまで、こゝでのチッチッという地鳴き以外、それを実際に聞いたことがなかった。

街を練り歩いている学生達のデモの先頭で、知合の学生が、ピッピーピッピーと笛を鳴らしていた。目を覚ますと、アカハラが鳴いていたことがあった。ナポレオンソロに出てくるスラッシュ達(ツ



グミ団)の陰謀ではなかった。小鳥の夢を見た朝は、必ずといってよいほど、庭に小鳥の鳴声を聴いている。そして、夢の中の私は、大底、中学生になっている。私の小鳥の夢に関する限り、フロイドの学説は当たらない。ワーズワースの「郭公に寄す」にこんな一節がある。

O blithe New-comer! I have heard,
I hear thee and rejoice.
O Cuckoo! shall I call thee Bird,

Or but a wandering Voice?

I have heard, I hear というのは、英文学者、沢村寅二郎氏の解説によると、「少年時代に聞いたその声を今また聞く」とするのが通説だそうである。数年前、藻岩山の南側、北ノ沢に住むこととなって、少年時代に聞いた小鳥の声を、今また聞くことになった。この号が出る頃は、郭公ばかりでなく、ほかのNew-comersも沢山やって来ている。(つづく)

道南のオジロワシなど

山 田 佑 平

私は猟歴6年の新米ハンターです。だから野鳥の会の方々には申し訳ないが狩猟のできる鳥だけの区別がようやくというところですが。でも20年間くらいポツポツと山野を歩き続けて居りますので、いろいろの動物とも出会う機会があり楽しい思い出が数々あります。オジロワシのことは本誌2号で知内温泉館主の方が紹介しておられますが道南の東岸にも現在見られます。

その一つは恵山より4軒ほど西寄りの日浦灯台附近の崖上で、頂上へは人が近付く事が困難のためでしょう。数は1~2羽位より見て居りません。その二は鹿部町の北で出来潤崎と松屋崎の間ですが、これはトド撃ちのため、漁船で先輩について出掛けた折に望見したのですが、古木の頂、切り立った岩の上など高いところにジッと停っているものや、50メートルほど上空をゆっくりと飛んでいるものなど、その数は2桁に近いものです。どのようなものか日浦の方が尾の白さが鮮かです。200メートル以上に近づくことは困難のようです。さして飛行速度は早いように感じませんが、2トン程の漁船よりはるかに速いものです。数の多い出来潤の方は駒ヶ岳の噴火等で今は古い巨木はなく、ワシの方も渡りの途中でしようから営巣等は見られないことでしょう。私が見るのは日中ですが、夕方の飛び去る方を見ますと室蘭方向の崖の見えるところですから、いづこの土地でも天下の要害にたてこもるのは同じですね。いずれも秋遅くより2月~3月の雪のある頃までのようです。折を見て夏季に調べて見たいと存じていますが、ここにも海岸に新国道ができ、本年夏には整備を終ることでしようから案外と短い安住の地となるのかもしれない。

良く観察しようと思えば、鳥のいるところへ歩かねばならず、良い写真を撮ろうと思えば、それなりの辛抱が必要です。ハンターにもいますが、車の中から銃を撃つような方は、その気持だけでも鳥の仲間には入れませんね(ただし、鳥に近づくのには、この方が有利であるこ

とは事実ですが)。お金と暇が少ないので望遠レンズのついたカメラまではとうてい手が出ませんが、人のフンドシでは8ミリカメラと共に相当やってきました。今更カメラの年齢ではなく、愚妻より他人がぞくぞくと家を建てていることを毎日尻をたたかれつつある身分ですが如何ともならない毎日です。私の本来はスケッチブックとカメラをかついで歩いた方が良いと思っておりますが、いまでは銃をかつぎ熊追いかたわら、野生のワサビを摘み、熊の食べたウドの根元にビックリしながらも、農家の方が子供の運動会のため、わざわざ川で突いたマスにワサビをキカシチビチビとやりながらの山の話(時には漁村での炉辺の話)が何より楽しく存じて居るものです。したがってカモも猟期を通じて1~2羽くらいですからすこぶる猟率の悪いハンターなのでしょう。第9号には観察のための図鑑紹介がありますので、その方への意欲を燃そうと存じてます。道南の渡り鳥の休むところは、工場のために埋められ、別荘地のために整地されてなくなりつつありますが、私の関係している船の方の話を総合すれば、港内でのカモ類は依然として相当の群を以て移動をしているようです。

恵山地区で一昨年に出食わしたことですが、道南でも有数の出稼ぎ地方のため、小さな漁業のかたわら留守家族が猫の額ほどの畠に、豆やトウキビを播くわけですが「ごん兵衛種播きゃ、鳥がつつく」の例えのとおり、キジさんがその靈感を以て片端から掘り起して食べてしまうので、つくづくと手を焼いて、保護鳥であることは知りながらも、畠のすみで見つけたキジの卵も『こんちくしょう』とのことで、そっくり茹でたりして食べてしまうので「12・3ケもあるのでけっこうたべごたえがある……」とか『5月頃に来て捕ってくれば一番ありがたいのに』とオバさんが宣わって居ります。

環境が変れば、一方だけの判断も良いような悪いような気もするこの頃です。

餌付け

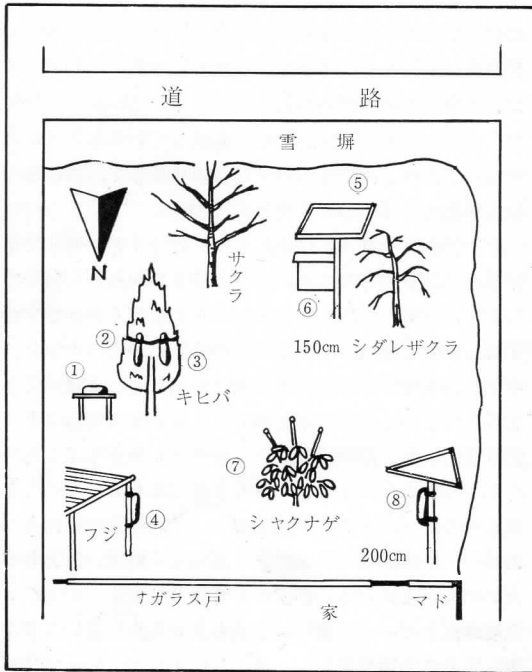
平 沢 清 一

去年の夏コムドリが、2階ベランダの巣箱から南へ帰ったが、家のこんだ西岡55番地では、花が咲く迄小鳥は見られないと観念したものの、半信半疑で2mの積雪の庭に図⑤の餌台を作り、生米少々、リンゴを二つ切れて置いて置いた。

3日目の1月31日15時35分小雪、シジュウカラ7羽ご来籠、発見者は女房。以下、雪の庭に来た小鳥を餌付メモによると

- 2月4日8時30分晴 カケス⑤に1羽
- 6日12時25分晴 ヒヨドリ⑥に1羽
- 16時5分 ジョウビタキ⑦に1羽
- 8日12時10分雪 スズメ②③に20羽
- 13時 ツグミ、桜に1羽
- 13時30分 ジョウビタキ⑦に1羽
- 12日13時15分晴 シメ⑦に1羽
- 13日8時 晴 アカゲラ桜から⑥に1羽
- 14時 キレンジャク②③⑤⑥に8羽

シジュウカラが来た頃、洗濯屋のライトパンの音で飛び去ったので、図④③⑥⑧とガラス戸を結ぶ庭の雪を南西側に掘上げて、巾5m長さ4mの空地を作った。音、



光、影が緩なすもの気配に小鳥が煩わされたい環境を造ったため、効果は95%である。彼岸の中日ともなると人工の雪塀は半ばとけたが、餌を求めてキレンジャク、ヒヨドリが来た。小鳥のメニューは

- 豚の脂肉 シジュウカラ、アカゲラ、ジョウビタキ
- リンゴの種 シジュウカラ、ヒヨドリ
- リンゴ キレンジャク、ヒヨドリ、ツグミ、シメ、カケス
- パンの耳 シジュウカラ、アカゲラ、ヒヨドリ、カケス、ツグミ、シメ、ジョウビタキ、キレンジャク
- ヒエ。アワ。スズメ
- 残飯 キレンジャク (但、2週間後、1羽)
- 焼魚の皮 売行き不良

パンと脂肉は、藤ノ沢小鳥の村の小沢村長さんの助言で、編袋に入れて散逸を防いだが、アカゲラはあの嘴でキョッキョッと突きまくるので、直かに木に巻いている。カケスは美しい鳥だが、餌を餌台で食べないで、くわえたまま逃げるので、可愛気のない鳥だ。スズメはテーブルマナー最高で、頭ごと雪に潜り、背に雪をかぶりながら餌を残らず食べてくれる。

2月13日は、私には忘れ得ぬ小鳥の日である。14時、キレンジャクが8羽庭の②③⑦に降りた。眼前2mで頬が紅潮したことを今でも覚えている。早速さとう美さんと呼び、16時48分飛び去るまで、左手にジンロック右手に双眼鏡で餌付成功を喜ぶ観鳥の宴をはった。

レンジャクが庭に来たのは、2月は20日を除いて連日で、20日頃からボスが他の仲間を追放するため、1羽だけがリンゴを食べる結果になった。3月6日8時35羽が一挙に来た時は、庭が真黒になった。ひよろ長いヒヨドリも、カッコのいいツグミも、レンジャクが冠毛を立てて黒嘴を一杯に拵けて怒ると逃げるが、このレンジャクもシメにはかなわない。その点スズメは餌が違うせいか我関せずで悠々ヒエやパンを食べている。レンジャクはリンゴ好きだが、割って実を空に向けておくと食べる、しかもいたんで茶色になった処から食べるが、皮だけ残す。(ヒヨドリは皮のまま食す。)

鳥については駆出しなので大きなことはいえないが、2月7日10時、8日13時20分、3月15日11時、各日とも晴天、暖かい日で、ジョウビタキが1羽来た。15日のはさとう宅で3人で見たが、形、色、尾の振り方でこの鳥と考えている。写真をとってないため残念至極。

PRが利いて、マーケットの肉屋、野菜屋のご主人、雑貨屋の小学生が小鳥にと、餌になるものを寄贈してくれる現状だが、55番地には5戸が適当に餌を与えている。春にはヒマワリを植え、カラを呼び寄せて、シジュウカラ用の巣箱にその子を産ませようと準備をしている。

キレンジャク

新宮 康生

わが家のわずか 100㎡の庭にキレンジャクが姿を見せたのは、札幌中がオリンピックの喧噪からやっと解放された2月20日頃であった。

それまではスズメ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツゲミムドリ、アカゲラ等が入れ替り、粒餌、パンクズ、豚脂、リング等をつつきに来ていたが、キレンジャクの一群が加わって、にわかになぎやかになった。よく見るとこの頃からシメも2,3羽加わっていた。

毎朝チリリーともヒリリーともきける美しい鳴声を交しながら、10～30羽位づつどこからともなく、お向いの庭の栗の大木の梢に集まる。大体日の出時刻の前後である。

雪が地面を覆っていた3月中旬までは少ないときで40羽、多いときは130羽位が勢揃いし、風上の方に頭を向けて一斉にヒリリー、ヒリリーと鳴交わしている。その中1羽が頃合を見計らっていたかの如く40m位を一気にリングの餌台へ滑空して来る。しばらく周りをうかがっているがやがて2つ割にしたリングの果肉をつつき始める。と、それを合図かのように栗の梢から5羽、10羽づつ一気に滑空（ほとんど羽ばたかないで）して来る。そして餌台の上や、リングをつけてある根曲竹の上で餌のとり合いはじまる。ただ無心に食べるもの、やたらと意地が悪く餌台を一人じめしたいもの、負けてなるものかと大口を開けてつつきかえすもの、滑る竹にうまくとまれないで苦労しているもの、ハチドリのように飛びながらつつくもの、シメやヒヨドリに追払われるもの、さまざま個性がみられる。一通り食べ終ったものは栗の梢に帰って行っては一休み、又食べにやって来るといった具合ですばらしい食欲である。50羽位来るとリング10個位は1時間かけないで皮だけにし、しまいに下に落ちた皮をもシメと取り合っているものもいたシメはきかん坊だ。一つのリング、一つの餌台を一人じめしようとあの大きな銀色のくちばしでキレンジャクを追払っていた。

近くを人が通ると驚いて一

斉に飛び立ち栗の梢に帰って行く。折角楽しげに食べているのだからと用事があっても出来るだけ外に出ないようにしたり、出勤時間になっても閉じ込められたままのこともしばしばであった。昼の間中この近辺にいるわけではなく時折数時間も1羽もいなくなることもある。廻遊であろう。この廻遊は雪どけが進むにつれて多くなって来た。あちこちで餌が得られるからだろうと思う。夕方は日が落ちるまでいるが夕日が落ちると一斉にいつこかへ飛び立って行く。

いったい夜はどこに居るのだろうか？

3月20日頃から末にかけて段々数が減って来て30羽位しか見られなくなった。彼等もシベリヤに帰り出したのかな等と家内と話し合っていたが、3月31日と4月1日に約15cmの積雪があり、この日の午後から又100羽以上勢揃いするようになった。現金なものだ。他で餌が得られなくなったからだろう。いそいでリング集めに走り廻った。この餌にするリングであるが、数軒の八百屋、果物屋さんにくずリングをとっておいてもらい、勤めの帰りに集めて廻った。リング箱で10も集めたかも知れない八百屋さんに何するかきかれて説明に苦労し、餌台のリングが減っていると上機嫌だと家中の者に冷かされたり——考えて見ると物好きなことかも知れない。4月2日にウトナイ湖に行き、帰って見たら又130羽位来ていた。この中にヒレンジャクが2羽見られたのを特記した。最後と思ひ至近距離からカラー写真をとった。

もうそろそろ彼等は北の国へ帰るだろう。10羽か20羽位残って呉ればいいのにと、家内と話し合ったが、よく考えて見ると、やはりそろってシベリヤに帰り、子供を育て、その子供達と一緒に又今年の冬来訪してくれる方が自然の摂理にかなっているし、彼等のためでも、また私達のためでもあろうと思っている。

次の冬も又リング集めに走りたいものである。

4月5日記

(札幌市白石区北郷4条3丁目在住)



屠殺場の野鳥

入江 義智

オジロワシが屠殺場にいる。と聞いて3月の初めと、つい最近、雪の融けた屠殺場に2回行ってみた。屠殺場は千歳空港より南方に1Kmほど行ったところにある。

「オジロワシだ！」空に4羽、トビとは別に群をつくり上昇気流のって高く舞っている。真白な尾が目立ってじつに雄大である。そのときは4羽だったが、多いときには9羽も集まることがある。

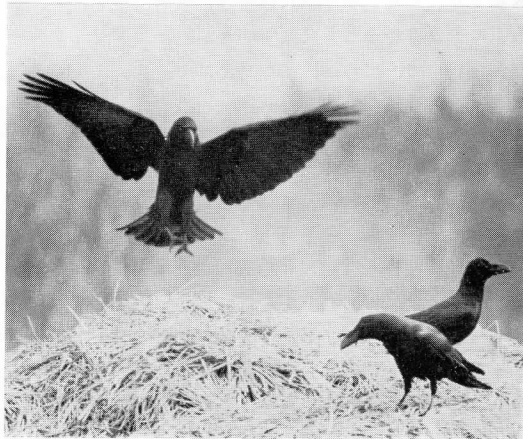
オジロワシが捨てられた肉をねらって降りてくる姿を写真にとろうと、ブラインドの中で待つことにした。しかし、いつまで待っても警戒してぜんぜん降りてこようとしない。そんなところにハシブトガラスがたくさん来た。オジロワシは依然こない。半分ヤケクソになってカラスの写真を撮っていると、表情がまことに面白い。それに、カラスの飛行技術にはすばらしいものがある。たとえばUターンする時には、翼を水平から斜めにして、スピードをゆるめ、翼を細かく動かしながらUターンするのだ。そのときの初列風切羽は大きく開いていてじつにあざやかだ。降りる時も、翼を立てて大きく広げ、足

を前に出し、尾羽を広げ着地する。

「カーカーカーカー」、「アーアーアー」、「カオーカオーカオー」、カメラをのぞいている間に私の近くが非常にうるさくなってきた。ブラインドの穴から外を見ると、一面真黒である。上下左右、至るところにカラスがいる。頭のすぐ上にも来ている。そのすさまじい声を聞いていると、ぶきみで、恐ろしく、今にも襲撃されはしまいかと思ったくらいである。

その日、オジロワシはとうとう降りて来なかった。ここに集まるオジロワシがどこを寝ぐらにしているのかにはわからない。つきとめてみたいものだ。

(3月28日)



鳥の記録

◇夏鳥・漂鳥の初認

カワラヒワ	3月20日	江別市大麻	百武 充
	3月23日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
	3月24日	札幌市真駒内	新妻 博
	3月30日	〃 西岡	さとう実
ヒバリ	3月20日	江別市大麻	百武 充
	3月25日	札幌市白石北郷	新宮康生
	3月26日	美唄市	藤巻裕蔵
ハクセキレイ	3月24日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
セグロセキレイ	3月26日	札幌市真駒内	新妻 博
モズ	3月12日	広島町西ノ里	百武 充
	3月26日	札幌市西岡	さとう実
	4月 9日	江別市大麻	百武 充
キジバト	3月 3日	札幌市西岡	さとう実
	3月26日	千歳市北信濃	阿部雅樹
	3月27日	美唄市光珠内	藤巻裕蔵
	3月27日	江別市大麻	百武 充
ホオジロ	4月 5日	千歳市北信濃	阿部雅樹
ベニマシコ	4月 4日	札幌市西岡	さとう実

野鳥十句

園田 瑛

声ありて鳥の漂白見し雪野
 冬鴉庭に来 妻の椅子緊まり
 赤啄木鳥の会話はじまる雪解風
 樹下御堂囀りときに交し合う
 野火ちろろガラスの鶴が地を翔てり
 陶満つる森の誘い青葉木菟
 鶉の鋭声発止と受けて鳥えの航
 ひよどりがすぐ消えそうにスラックス
 てぶくろを胸にねむらせ山鳩病む
 藁塚えほそい糸かけすずめたち

藤の沢探鳥会に参加して

渡辺伊沙子

2月27日、藤の沢白鳥園（ジングスカン亭）での探鳥会に参加しました。雪が小止みなく降るあいにくの天気でしたけれど、50人ほどの人が集まり午後まで熱心な観察が行なわれました。

白鳥園の付近は雑木林に囲まれ、札幌市内でもまだまだ緑の多いところで、小鳥たちの楽園のようです。白鳥園の庭の木には脂身、とうきび、リングなどが備えつけられていて、そこにいろいろな野鳥が餌を食べに来るのです。私が着いたときは、ちょうどシジュウカラがスズメに混って忙しく脂身をついばんでいました。次にミヤマカケスが数羽、このミヤマカケスが来るのにはおもしろいことに小鳥の村の村長（小沢さん）が「呼びに行く」と戸外に出ましたら、まもなく集まってきたので、どんな風



にして呼んだのか興味シンシンというところ、でもそれは秘密なのだそうです。それからツグミ、ヒヨドリ、シメなどが次々にやってきてはいろいろなポーズで私たちの目を楽しませてくれました。いつもは林の中で遠くの小鳥を双眼鏡でのぞくのですが、今日はすぐ近くで観察できたので、餌をついばむようすやその鳥の特徴も本と比べあわせてよくみることができ、とてもよかったと思います。絵でみているといかにもケバケバしいような配色の鳥が、自然の中にいると不思議とあたりに調和してすばらしい色彩をみせてくれるのです。自然の配色は人の力の及ばないみごとさと、あらためて感心しました。

◇この日の記録 スズメ、シジュウカラ、アカゲラ、カケス、シメ、ヒヨドリ、ツグミ、オオアカゲラ 計8種
◇参加者 約50名

ウトナイ探鳥会

4月2日、定期バス3本に分散乗車してウトナイに集まったのは約30名、藤ノ沢につづきこの日も雪模様でしたが、ときどき晴れ間も出て風もなく、まあまあの日和でした。ただ、昨年より雪がずっと多かったのは予想外でした。

鳥はほとんどが対岸寄りにいて、双眼鏡でもちょっと苦しい距離でしたが7台ほど並んだコーワスコープ（25倍の望遠鏡、水鳥の観察にはたいへん便利です）を交替でのぞいて楽しみました。オオハクチョウは残念ながら

20羽くらいしか残っていませんでしたが。ヒシクイの大群が入っていて、オジロワシが上空を飛んだりするときには、100～200羽が鳴き交しながら舞い上り、壮観でした。カモの種類も多く、とくに白いミコアイサのオスが人気を集めました。そのほか渡りの途中のツルシギの群も戻ってきたオオジュリンなどもいて、わりににぎやかな1日でした。

◇この日の記録 オジロワシ、トビ、ハシボソガラス、ツグミ、ハクセキレイ、オオジュリン、ベニマシコ、ヒバリ、マヒワ、コゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラ、キジバト、エナガ、ツルシギ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガモ、オナガガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、カワアイサ、ミコアイサ、ホオジロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、アオサギ、解散後にノスリ 計28種

◇参加者 約30名

北国の自然と野鳥

—— 井上副会長が記念出版 ——

本会副会長の井上元則先生が古希を記念されてこの本を出版されたので御紹介します。御存知の方も多いと思いますが井上先生は本道の森林昆虫の権威で、転職がら全道各地の森林を歩かれ、長年野鳥観察を続けられました。特に本道の鳥については、十勝三股でミユビゲラを発見し、本道にもこの鳥が生息していることを確認され学界に紹介する大きな功績を残されています。

昔、先生が若かった頃、夢中になって鳥を追いかけていたため、ミアカショウビンとアダナをつけられたそうですが、最近の井上先生はセンミリ先生と呼びたくなるほど生態写真の撮影に夢中です。御自慢のセンミリのレンズを駆使してどんなげっさくが生れるか事務局一同楽しみにしています。

先生の探鳥会の出席率は皆勤に近く、毎度豊富な話題

で私たちを楽しませて下さいます。探鳥会の話のなかでは昨年愛山溪での先生の頑張り目覚ましく、山に登りはじめて間もなく、一合目で完全にダウンと見られていたのが、時がたち二合目三合目と登るうちに元気快復、最後まで元気に歩き通されました。これは先生の豊富な山歩きの実績を証明し、身心ともにきたえられていることを証拠だてているといえることでしょう。

本の予定で始めたのが井上先生の紹介になってしまいました、(それだけ先生にまつわる話題が豊富ということになります。)最後になりましたがこの本は市販されません。事務局でとりつぎすることをお知らせし紹介にかえさせていただきます。なお、本書は北海道公共図書館協会等の選定図書になっています。

B6版 207ページ 農林出版 刊行 定価 700円

赤いハクセキレイはいませんか

山階鳥類研究所では、毎冬東京都と愛知県のねぐらに集まるハクセキレイの標識調査を行なっています。これらのうちには、北海道やカラフトで回収されたものも多く、渡りの経路を知る手がかりになっています。

今年は、足環のほか、体の一部に色をつけて放鳥しています。もし次のようなハクセキレイをみたら、研究所か本会の事務局まで、月日、場所、着色部分、足環の色通過したものか住みついているものかなどをお知らせください。

- ◎顔に赤ペイント、赤か黄色の足環(愛知県で放鳥)
- ◎腹に赤ペイント、アルミの足環(東京都で放鳥)
- ◎足環だけ(東京、愛知ほか)

なお山階鳥研は東京都渋谷区南平台町8-20です。

野幌森林公園を歩きましょう

野幌森林公園をブラブラ歩きながら鳥や花を見ています。おヒマな方はどうぞお出かけください。

◇日時 5月21日、6月18日、7月16日

◇集合 6、7月は午前9時国鉄大麻駅待合室、5月はコースを変えますので未定(同行のご連絡をくださる方に後ほどおしらせします)

◇昼食、雨具などお持ちください。

◇歩く距離は12キロくらいあります。

◇都合により中止したり、日を変える場合もあります。

同行される方は必ず前日の午前中に下記までご連絡ください。

◇連絡先 道庁自然保護課 百武 充

(TEL 231-4111-内線3895)

<事務局だより>

◇ さわやかな季節になりました。ついこの間まで、さむざむと空を刺していた木々の梢も、もう霞むようにやわらかな新緑に包まれはじめました。でも、3月末から4月にかけての気温が低かったせいか、鳥たちの渡りは少しおけているようです。第10号ができました。うまくバードウィークの間にお手もとに届いたでしょうか。

◇ こんど、会員の畠山周治さん等の努力で、旭川市に旭川野鳥愛護会が結成され、さっそく活動をはじめています。野鳥愛護会の行事はどうしても札幌中心になってしまうので、地方の会員にはいつも申しわけなく思っているのですが、旭川のように独自の会ができるのは、私たちにとってもうれしいことです。発展を期待します。

◇ 道庁の組織の一部が変り、生活環境部がスタートしました。事務局のある自然保護課も11階から12階に移りました。